
雪解

若木士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪解

【Nコード】

N4253BA

【作者名】

若木士

【あらすじ】

高校一年生の少女は、中学生の時に起きたある事件をきっかけに心に傷を負った。そんな彼女がクリスマス・イブの夜に出会ったのは、気の弱そうな一人の少年だった。

（前書き）

この物語はフィクションです。現実の人物・事件・店舗名等とは一切関係ありません。

「じゃあね、結^{ゆい}」

「うん。またね」

手を振って、駅前に向かう三人の友達と別れる。

高校の校門前に一人が残ったわたしは、口と鼻を両手で覆うと、冷えた掌に温かい息を吹きかけた。

頬を叩いてくるような冷たい風は無いが、今日は朝からかなり冷え込んでいる。不幸なことに空はずっと厚い灰色の雲に覆われていて太陽の光が届かないため、昼になっても気温はちっとも上がってくれない。

わたしはピンクのマフラーを引っ張り上げて口元を隠すと、手をダッフルコートとセーラー服の袖の奥に引っこめて商店街に向けて歩き出した。

十二月二十四日。

高校一年生の二学期最終日であり、初めて東京で迎えるクリスマス・イブだ。

クリスマスは恋人同士で過ごす日、なんて習慣が日本にはあるが、わたしの友人達もその例に漏れない。駅前で彼氏と待ち合わせしてデートするらしい。

わざわざ女子高を選んでおきながらどうして男の子と付き合ったりするのか、私にはさっぱり理解できない。そんなことをするくらいならば初めから共学に行けばよかったではないか。わたしが高校に入って一番驚いたのは、男の子に好意的な感情を持っている生徒が少なくなかったことだ。

平日の昼ということもあって人通りの少ない商店街は、一昨日と同じく到る所にイルミネーションのための電球が飾り付けられていた。まだ午前中なので明かりは点けられていないが、星やサンタクロースの飾りだけでもクリスマス気分を味わうには十分だ。

なんて言ったところで、クリスマス及びその前日はわたしにとつては何ら特別な日ではない。サンタクロースからのプレゼントを期待する年頃はとっくの昔に卒業したし、男の子とデートするなんてはもつての外だ。周りがクリスマスモードに入るのでわたしもそれに合わせたりはするが、所詮その程度のものでしかない。

そんな冷めた感情を抱きながら花屋の店先に飾られたクリスマスツリーに一瞥をくれると、わたしは鞆の中から携帯電話を取りだして電源を入れた。そして新着メールが無いかわい合わせると、一件だけメールを受信した。

送信者は向井響子。むかいきょうここの商店街の一角にある個人経営の小さな洋菓子店《ムカイ屋》を菓子職人である旦那さんと一緒に経営している中年の女性だ。ムカイ屋はケーキの他にも色々なお菓子を手頃な値段で売っており、それらを求めて約半年間に渡って頻繁に通っていたせいで彼女とはすっかり顔馴染みになってしまったのだ。

メールを開くと、内容は予想通りだった、

今日は午後二時からムカイ屋で日雇いのアルバイトをすることになっている。クリスマスで忙しくなるので接客の手伝いをして欲しいということだ。と言っても、普段のまったりとした様子からは、追加で人員が必要になるほど忙しくなっている場面など全く想像できないのだが。

そんな風に、視線を携帯の画面に固定して考え事をしながら歩いていたのがいけなかったのだろう。

わたしは正面から人とぶつかり、携帯を落としてしまった。

「あつ」

足を止めて後ろに転がる携帯を目で追う。すると誰かがその携帯を拾い上げたので、わたしは持ち上げられる手を追いかけて顔を上げた。

「あ、すみませ——」

その人と目が合い、わたしは硬直してしまった。

男の子だった。

わたしの携帯を拾ったのは、同い年くらいの少年だった。

男性がわたしを見て、さらにわたしの持ち物に触れているという状況に直面したわたしは、身体の奥底から込み上がってきた震えに支配され、身動き一つ取れなくなってしまった。

相手はわたしの携帯を握りしめたまま、動かずにじっとこつちを見ている。

一刻も早く携帯を取り返してこの場から逃げ出したいが、金縛りにあったみたいに身体は言うことを聞いてくれない。目を逸らすことも、そうした途端に何か恐ろしいことが起こりそうでもとても怖くて出来ない。

「え……あ……」

乾いてカラカラになった口から、言葉にならない掠れた音が漏れる。足は寒さとは違う理由で小刻みに震え、掌には冬なのにもかかわらず汗が滲んできた。何とかしないと、という文字だけが頭の中をぐるぐる回り、他には何も考えられない。

視界が歪み、わたしを見下ろしてくるあの男の姿が見えた。それだけに留まらず、あの時の尻餅をついていた地面の感触の他、あらゆるものが蘇ってくる。

そんな状態がどれくらい続いたのか。わたしは遂に意志力を振り絞り、捨て身のような心持で携帯を相手の手からひったくると、身体を反転させて一目散に走りだした。

あの場から、あの少年から一センチでも離れたいという一心で足を動かし続ける。そして体力の限界が訪れて、ふらふらとなりながら立ち止まった。

「はあ、はあ、はあ」

両手を膝について、荒くなった息を整える。

体育の授業でもこんなに走ったことは無い。おかげで寒さは何処かに飛んで行ってしまった。外気に晒されている顔や手は冷たいが、服の下は熱気みたいなものが籠っている。

ゆっくりと息をして、動転している気持ちを動悸と一緒に落ち着

ける。

バカ、と心の中で自分自身を叱咤する。

すっかり油断していた。心構えが出来ていればこんな風にはならなかった。女子校に通うようになってから八カ月、男の子と接する機会が皆無だったせいで防衛意識が緩んでいたのだ。

そうやって自分の軽率さを反省しながら、電柱に背中を預けて体力が回復するのを待った。

* * *

わたし、井御頃結は中学二年生の夏に同級生の男子から暴力を受けた。

小学生の時には放課後はいつも走りまわって遊んでいたし、中学に上がってから運動部にこそ入らなかったがインドア系だったというわけでもなく、人並み以上の体力は備えていた。

けれどもそれは、女という種別の中のことでしかなかった。

男相手では、わたしは全くの無力だった。

たいした抵抗も出来ず、一方的に。

それ以来、わたしは男性が苦手になった。

身体を触られるのはおろか、見られるだけでも怖気が震ってしまふ。また襲われるんじゃないかという妄想が頭をもたげてくるのだ。

だから事件以降、中学を卒業するまでは、男子とは出来るだけ距離を開けて過ごした。それに、わたしが暴力を受けたことが広まっていたから、クラスメイト達は男子も女子もそれなりに気を使っていたので、学校での日常生活はなんとか送れていた。

けれども彼らの心遣いは、わたしに息苦しさを与えるものでもあった。彼らの視線に含まれる憐れみや好奇心に晒されることは、わたしにとっては負担でしかなかった。

だからわたしは、それらから逃れるために地元を離れて東京の女子高に進学した。そうすれば男子に怯えることなく、奇異の目で見

られることも無いと思ったからだ。

だから、東京での知り合いの中に、わたしが男性を苦手としていることを知っている人はいない。誰にも教えていないし、バレるような場面も無かったからだ。

* * *

十二時を少し過ぎたあたりまで行きつけの書店で時間を潰し、ファーストフード店で昼食を済ました。そしてそれからムカイ屋に向かった。

一階が店で二階が居住スペースという構造をしているムカイ屋の建物は、商店街の中でも学校側の端に位置している。だから商店街の中ほどにある本屋からだ、来た道を戻る形になる。

ガラス張りの店の壁には、ソリに乗ったサンタとそれを引くトナカイが描かれているポスターが貼ってある。二週間ほど前から張り出されていたものだが、これが見られるのも今日か明日までだろう。可愛い絵柄が気に入っている、剥がされたものを貰えるかどうか後で訊いてみよう。

いつものように店の左端にある扉を押して店内に入ると、熱気を含んだ空気が顔を包みこんできた。

同時に、扉の上に取り付けられているベルが軽快で店員に来客を知らせる。

「いらっしやませ」

良く通る声を発しながらカウンターの奥から出てきたのは、胸部に店の名前がプリントされた緑色のエプロンを纏った響子さんだった。

「あら、結ちゃん」

「こんにちは」

笑顔で呼びかけてくる響子さんに頭を軽く下げて挨拶する。

店に入って正面にレジがあり、そこから右にケーキなどが並べら

れたショーケースのカウンターが伸びている。入口の右にはわたしの身長と同じくらい——なので一五。センチくらいだろう——の植木が置いてあり、さらに右奥には小さな木製のテーブルと椅子二つの組み合わせが二セットある。

「外、寒かったでしょう？」

「ええ」

「今日はわざわざありがとね」

「いえ。別に予定も無かったですし」

「それはそれで寂しいわね。せつかくのクリスマスなのに。じゃあ早速で悪いんだけど、こっち来てちょうだい。いつまでもそこに居てもあれだから」

響子さんは手招きしながら、右奥にある「関係者以外立ち入り禁止」と紙が貼られたドアを開けてわたしを誘導した。

そう、今日は遊びに来たわけではないのだ。普段のようにお菓子を食べながら雑談に興じる、というわけにはいかない。

案内されたのは、手狭な荷物置き場のような部屋だった。二台の鉄製ロッカーが右側に設置されており、左側には二つのパイプ椅子が置かれている。部屋の角には、古いポスターと思しき筒が箱の中に立てられている。

「ちよつと待つててね」

響子さんが奥側のロッカーを開けて中に手を入れる。

わたしは手前に椅子に下ろした鞆の上に畳んだマフラーを載せると、コートのボタンを取り外しにかかった。

「これでいいかな……あれ、制服で来たの？」

ロッカーから緑色の布を引っ張りだした響子さんが、露わになった紺色のセーラー服に気付いたようだった。

「今日終業式だったんで……マズかったですか？」

脱いだコートを畳んでマフラーと同じように置く。

「駄目ってわけじゃないんだけど……」

響子さんは困ったように両腕を組んだ。しかし直ぐに、

「ま、大丈夫かな」

と布を差し出してきた。

「これ着てみて」

「はい」

響子さんが身につけているものと同じムカイ屋のロゴ入りエプロンを受け取り、紐を首に掛けて腰ひもを後ろ手で結ぶ。ほぼ毎日やっているので手慣れた動作だ。

「うん。ちよっと大きめだけど、変ってほどじゃないからそれでいいかな」

そう言われ、わたしは身体を捻って全身を見回した。

「うーんと、多分大丈夫です」

ファッションセンスにはあまり自信はないが、変に感じるような箇所は一応ない。

「髪の毛はそんなに長くないからそのままでもいいか。それじゃ、今度は厨房まで来てくれるかな。主人に紹介するから」

その言葉を聞き、わたしはうるたえた。

カウンターの手伝いという考えばかりが先行して完全に失念していたが、この職場には響子さんの旦那さん、つまり男性もいるのだ。厨房から出てくることはほとんどないとはいえ、当然ながらコミュニケーションを全く取らないというわけにはいかない。それはわたしにとって厄介な問題だ。

「結ちゃん？ どうしたの？」

「あ、いえ。何でもないです」

わたしは手を身体の前で小さく振りながら否定する。

「……そう。じゃあ行こう」

響子さんは怪訝そうな顔をしたが、直ぐにそれを引っ込めた。

心の準備をしてから臨めば、男性と話すことも出来なくはない。多量の精神力を消費するため長時間は無理であるが、可能か不可能かと言ったら可能だ。

厨房に行くまでの間、わたしは響子さんの後ろでバレないように

深呼吸をして心のコンディションを整えた。

* * *

響子さんの旦那さんでこの店の店主でもある裕治ゆじさんに挨拶をした後、わたしはカウンターで響子さんから簡単なレクチャーを受けた。

注文を聞き、商品を箱に入れ、レジを使って会計をする。そんなには難しくない、と思う。

「ただいま」

という声が奥から聞こえたのはその時だった。そしてそれは明らかに男のものだった。

わたしはドキリとした。

「あ、優輝ゆうき、ちょっとこっち来て」

響子さんが声を張り上げて、優輝という名前らしい声の主を呼び寄せる。

身体を強ばらせながら、わたしは視線を奥に通じる通路に向けた。

「えっ……」

姿を現した男の子——おそらく彼が優輝君なのだろう——の顔を認識したわたしは驚いた。

「あっ……」

相手も同じように声を漏らす。

何故なら、わたし達は初対面じゃなかったからだ。

優輝君は、午前中に商店街でわたしの携帯電話を拾った少年だったのだ。

どうして、この人がここに？

「今日手伝ってくれる結ちゃん。ほら、挨拶しなさい」

「えっ……と……」

響子さんに促された優輝君は目を泳がせて、わたしの方をちっとも見ようとしない。と言っても、わたし自身も優輝君の顔から目を

逸らしていて、視界の端っこで彼の姿を捉えているだけなのだが。

「ほら早く」

響子さんに後頭部を小突かれ、優輝君は観念したかのように口を開いた。

「向井……優輝です」

そう言われたら、こっちも黙ったままではられない。

「い、井御頃結です。……よろしく願います」

すると響子さんは満足したように首を縦に振った。

「じゃ、あんたはあっちでお父さんの方手伝ってきなさい」

そして背中を押して優輝君を奥に追いやった。

「今が息子の優輝ね」

「息子さん、いたんですね」

男の子が退場したことにより、わたしは徐々に落ち着きを取り戻すことが出来た。

「意外？」

「そういうわけじゃないですけど……」

「今高一だから、結ちゃんと同じかな」

「そうなんですか」

「ちよつと人見知りが激しいとこがあるんだけど。だからさっきのは、あんまり気を悪くしないで」

響子さんは、視線を優輝君のいる店の奥の方に流した。

「学校とかでも友達いないみたいだし。まあ、だからってわけじゃないけど、優輝とは仲良くしてあげて」

そんなの無理だ。

と思ったが、もちろん本音は口に出さない。

「分かりました」

「わたしからお願いするつてのもなんか変だけどね。それじゃあわたしは厨房に居るから、何かあったら呼んでね」

励ましろるか、響子さんはわたしの左肩を軽く叩くと、奥に引っ込んでいった。

* * *

「ふう」

荷物置き場のパイプ椅子に沈み込んで疲れを吐き出した。

アルバイトが終わったのはついさっき、つまり午後九時だ。途中で休憩を挟んだが、それでも物凄く、特に精神面が疲れた。これが俗に言う、責任を負うということなのだろうか。あとは対人スキルの不足辺りが原因であろう。明るいうちはほとんど来なかった客も、六時過ぎくらいから増え始め、結構な人数を相手にしたものだ。後は、男性客がいたことであろう。

客の大半は女性だったが、女性だけというわけではなかった。今までこの店で男性を目にしたことが無かったため、何時の間にか女性客しかいないと錯覚していたらしい。迂闊と言っほかない。

幸い、店に入ってくる前に客をガラス越しに見て備えることが出来たし、カウンターを挟んでいたため接客不能に陥ることはなかったが、際どかったのも事実だ。

背もたれに体重をかけると、椅子が耳障りな音をたてて軋んだ。

この半年以上の間、女性だけの世界に居続けた上に男性をずっと避けていたせいか、男性の存在が意識の中から抜け落ちていたのだ。今日はそれを何度も思い知らされた。

結局、優輝君とは最初のあれ以降、一言も言葉を交わしていないと言っより、姿を見てすらいらない。わたしはずっとカウンターにいたし、彼は一度も奥から出てこなかった。

どこか避けられているような気がする。話したいはずがあるわけもないのでむしろそれ自体は助かるのだが、忌避されるというのはあまりいい気分はしない。

椅子を軋ませるのに飽きたわたしは、立ち上がると脱いだエプロンをロッカーに戻して帰り支度を整えた。コートのボタンを留め、マフラーをしっかり巻いて防寒対策を施す。外は昼間よりも一層寒

くなっているに違いない。

部屋を出て、カウンターでノートに何かを描き込んで切る響子さんに声をかける。

「それじゃあ、今日はこれで失礼します」

「あ、結ちゃん。今日はありがとうね」

響子さんは顔を上げて言った。

「わたしの方こそ、ありがとうございます。バイトなんてさせてもらって」

「いいつて。こっちからお願いしたことなんだから。はいこれ」

と、響子さんが差し出したのは、商品を入れるのに使われる白い箱だった。わたしも今日、何度も組み立てたり中にケーキやらバームクーヘンやらを入れたりした。

「……これは？」

「ケーキ四つ入れといたから。て言っても余りものだけだね。お礼代わりに」

「いいんですか!」

予想外の報酬に、わたしは心が躍った。

「取っとしてもしょうがないしね。結ちゃん好きでしょ？」

「ありがとうございます」

わたしは頭を下げると、箱を両手で大事に受け取った。

これで今日の夕食と明日の朝食は確定した。

「あ、あと。今日はもう遅いから優輝に遅らせるわね」

「えっ」

直前までとは打って変わって、わたしのテンションは急転落した。男の子と一緒にいるなんてたまったものではない。

「だ、大丈夫ですよ。一人で」

「駄目よ。結ちゃん可愛いんだから、暗い中一人で歩いてたら襲われちゃうわよ」

しかし、「襲われちゃう」という言葉にわたしの耳は敏感に反応した。

確か、東京の夜は危ないと何処かで聞いたことがある。普段はこんな時間まで出歩くことはないのので気にしたことはなかったが、それが本当だとすれば何かあった時、わたし程度ではひとたまりもないだろう。あの時のように。

意識した途端、急に怖くなってきた。

「だから、ね。頼りないかもしれないけど、一人よりはマシでしょ。裏口で待たせてるからさ」

「……分かりました」

見えない恐怖に晒されるより、男の子と一緒にいるのを我慢した方がいいという判断だ。響子さんの息子なら全くの見知らぬ他人というわけではないし、それに気になることもある。

わたしは響子さんに再度お礼を言つと、店の奥にある裏口に向かって重い鉄扉を開けて外に出た。

すると響子さんの言った通り、ジャンパーを着た優輝君が寒空の下で待っていた。しかし互いの視線がぶつかり、優輝君は俯いてしまった。

わたし達の間にも気まずい空気が流れる。

「……………行こ」

「……………うん」

わたしが歩きだすと、優輝君も後ろからついてきた。

嫌な雰囲気漂わせたまま、わたしが住むアパートへの道を二人で歩く。優輝君は常にわたしと二メートルほどの距離を空け、わたしが振り返るといつも顔を伏せている。言つまでもなく、会話などない。

わたしは住宅街に入ってからしばらくすると、道を外れて公園に入った。

道を進むよりもこの公園を横切った方が近いのだ。砂場、ブランコ、ジャングルジム、シーソーなど一般的な遊具は一通り揃っていて、平日の夕方や休日などは親子連れで賑わっている。しかし今はこんな時間なので、街灯の明かりで微かに照らされている園内には

わたしと優輝君しかない。

わたしは、ブランコを囲んでいる策の前で足を止めた。そして振り返る。

「……………ねえ」

わたしから男性に話しかけたのはあの事件以来、二年数ヶ月ぶりのことだった。

何故そんなことが出来たのかというと、今の優輝君には恐怖を感じなかったからだ。

「……………わたしのこと、嫌い？」

そして何故そんなことをしたのかというと、彼があまりにも露骨にわたしのことを避けていたからだ。ここまでされると、怖さなんかよりも不快さの方が上回ってしまう。

「……………ごめん」

「そうじゃなくて。ずっとわたしのこと避けてるじゃない。どうして？」

「……………」

優輝君は答えなかった。

暗闇で視界が悪いせいか、わたしと彼を隔てる二メートルの距離がとても遠く感じられる。その間を吹き抜ける冬の風を感じながら、わたしは優輝君の答えを待った。

「ねえ。どうして？」

しかし長い無言の時に耐えられず、もう一度訪ねた。

「……………それは」

黙秘し続けることを諦めたかのように、優輝君は消え入りそうな声で言った。

「それは？」

優輝君は、なおも逡巡してから言った。

「……………それは……………怖い、から」

「怖い？」

「……………うん」

思いがけない答えに思わず訊き返すと、優輝君は小さく頷いた。

「わたしのことが？」

「……うん」

「どうして？ わたし、何かした？」

「そうじゃ、ないけど」

こうして話している間も、優輝君はわたしの目を見ようとしないうちに、信じられないことだが、わたしは女友達と普段話すように話せていた。

「別に、井御頃さんだからってことじゃなくて……」

少し躊躇ってから、優輝君は続けた。

「人が、怖いんだ。……みんな、何考えてるのか分からなくて、僕のこと、どう見てるのか分からなくて。みんなが、僕に何かしてくるんじゃないかって」

「それって……」

「だから、あんまり、人と関わりたくないんだ。だから、井御頃さんが何かしたとか、そういうことじゃないから」

「それは、うん、わかったけど。でも、そういう考えはよくないよ」「えっ……？」

この時初めて、優輝君がわたしの顔をまっすぐ見た。そんなような気がした。

「みんながあなたに何かしようとしてるなんて、そんなことないよ」「……… どうして、そんなこと言えるの？」

「わたしはそんなこと思っていないもん。それに、そんな風に避けられたら嫌だよ。嫌われてるんじゃないかって思っちゃって」

「……でも……」

優輝君は右手で身体を抱えた。

わたしはその言動に強い既視感を覚えた。何処かで見たような、聞いたような、物凄く身近に感じる。

そうだ。これはわたし自身だ。

他人を怖がる優輝君の様子は、男性を怖がるわたしそのものだ。

わたしと優輝君では、対象に男性かより範囲の広い他人かという違いがあるだけで、やっていることは本質的にはなんの違いも無い。

今度は、わたしが黙り込む番だった。

優輝君に言ったことは、全てわたしにも当てはまる。自分のことを棚に上げて言っただけで、そんなものには何の説得力も持たせられない。

いや、そうじゃない。

「やっぱり、駄目だよそんなの」

優輝君だけにではなく、自分にも言い聞かせる。

「何かしたわけでもないのにそんな理由で避けちゃ、相手に悪いよ」
拒否される側に立って初めて分かった気がする。

「でも、井御頃さんだって僕のことを見て逃げちゃったじゃん。あれって、僕が井御頃さんの携帯を触ったから、それで僕のこと嫌に思ったからでしょ」

「あれは、ごめん」

わたしは謝った。

「わたし、男の人が苦手なの」

そして告白する。

「見られただけで寒気がして、だからあの時も、あなたがじつと見てくるから怖くなって、それで逃げちゃったの。でも、そういうのはもう止める」

「……どうして？」

「あなたを見て、何となく思ったの。そんなことしてちゃ駄目だって。それに、避けられるのって、すごく嫌な気分になるの。多分、今私があなたと話せてるのは、怖さよりそういうのが強いからだと思う。それに、他人を避けて生きていくなんて、多分無理だよ。わたしは今まで男の人を避けてきたけど、それすら今日は無理だったんだもん。絶対、何処かで限界がくるよ」

「……………」

「すぐには無理かもしれないけど、わたし、男の人とも不通に話せ

るようになれるように努力する。だから……」

そこで一旦言葉を区切り、鼓動が高鳴るのを感じながらわたしは続きを口にした。

「だから優輝君、わたしと、友達になって」

「……………それって」

優輝君は困惑した様子を見せた。

「駄目、かな？」

「だ、駄目じゃない」

優輝君は即座に否定した。

その反応速度は、彼の今までの態度からは想像できないほどだった。

「ええっと……………お、お願い、します」

闇に隠れていてどんな表情をしているかは分からないが、その声は確かに明るかった。

* * *

「ありがとね、こんなとこまで」

アパートの二階にあるわたしの部屋の前で優輝君にお礼を言った。此処に来て、初めて優輝君の顔をちゃんと見れた気がする。

自信なげな瞳をした少年だった。

「いいよこれくらい」

じゃあね、と言って優輝君は階段に向かって行った。その背中にわたしも、またね、と声をかけた。

公園での立ち話のお陰でわたしの身体は氷のように冷たくなっていった。一緒にいた彼もそうだろうから、お礼も兼ねて温かいお茶でも御馳走するのが心遣いというものかもしれない。けれども、抵抗なくそこまで出来るようになるのはまだ先になりそうだ。

でも、それでいいと思う。

今日のは第一歩。

これから少しずつ踏み出していくのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253ba/>

雪解

2012年1月11日10時47分発行